

## 2017 年度 生涯発達心理学 第 4 回授業のまとめ（解答）

ク ラ ス		学籍番号				
氏 名			講義日		講義回	第 4 回

第 4 講 胎生期から新生児期まで 個体の発生

個体発生メカニズム

ヒトの細胞は、常染色体 44 本と性染色体 2 本の合計 46 本の染色体で構成され、受精した時点の（ ①性染色体 ）の組合せによって、男女間の差が生じる。

体細胞は新しい細胞に何度も置き換わることができるが、通常、（ ②神経細胞 ）は新しいものが発生することはない。

胎児への環境からの影響

妊娠 4 ヶ月までは、胎児の諸器官形成の重要な時期。特に母親の影響を受けやすい。母親の飲酒は（ ③胎児性アルコール症候群 ）などのリスクが高まり、喫煙は胎児の成長を阻害し、（ ④低体重児 ）の出生率も高くなる。

誕生と新生児の特徴

新生児期は呼吸、（ ⑤血液循環システム ）の変化、消化機能、体温調節等の身体機能や反射という身体活動の外界への適応の時期である。独立個体としての生命維持、活動の準備期として位置づけられている。

生後まもなくは脳幹部の機能が優位で、そのため、反射が優位である。その後、機能部位が中脳、（ ⑥大脳皮質 ）へと移行するために反射の消失し（3～4 カ月後）、新たな行動の学習が見られる。

突然なにか大きな音を聞かせたり、持ち上げて手を放したりすると、何かにつかもうとするように、手足を外側に伸展し、つづいて内側に屈曲させる原始反射を（ ⑦モロー反射 ）という。

生後 1 カ月頃になると、微笑は外部刺激によって誘発される（ ⑧社会的微笑 ）または誘発微笑が示されるようになる。さらに 3 カ月頃になると、乳児は人の声や顔であれば誰に対してもよく微笑するようになる。